

秋田風俗 冬の版画集 其三

作成年代 昭和14年(1939)

寸法 14.8×46.6cm

かまど

かまどは釜や鍋を置き、煮炊きを行う場所の総称です。かまどは地域や時代によってその形態もさまざまで、家の規模でかまどの数も変化しました。また、かまどは神聖なものとされ、神を祀っている場所でもありました。

ゐろり

囲炉裏(いろり)はかまどと同じく火を焚き、煮炊きをする場所です。そのほかに暖房のためにも用いられます。西日本ではかまどが普及していましたが、東北地方では囲炉裏のほうが普及していました。この作品では、囲炉裏で暖をとる子どもの姿が描かれています。



こたつ

現在も全国的に使われている炬燵(こたつ)は、室町時代に誕生し、江戸時代以降急速に普及しました。このように全国的に普及しているものも、当時の東北ブームの中で、東北らしさを表すものの一つとして描かれました。

えじめ

えじめはエジコやエヅメなどと呼ばれる赤ん坊を入れておくための道具で、さまざまな形態があります。その中でも藁を編んだものが広く普及していますが、この作品には木製の桶が描かれています。これに赤ん坊を入れておくことで、繁農期でも夫婦で仕事に専念することができました。

まゆだま

繭玉は家中のさまざまな神に供えます。歳神や蚕神など、供える神によって繭玉の数が変わる地域もあります。また、それに合わせて神棚や座敷など、供える場所が異なることもあります。4・5ページの「まゆだま」も参照してみてください。